氏 名 （ 本 籍 ）	NUNES COSTA Raissa
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 9769 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本語の時間を表す複文節のテンス・アスペクト形式の解釈 ―日葡対訳データベースに基づいた「トキ節」の翻訳規則の一案―

主 査	筑波大学	教 授	博士（言語学）	矢澤 真人
副 査	筑波大学	教 授	博士（言語学）	沼田 善子
副 査	筑波大学	准教授	博士（言語学）	橋 本 修
副 査	東京大学	准教授	博士（言語学）	渡邊 淳也

論 文 の 要 旨

本論文は、日本語の時間を表す複文節「トキ節」におけるテンス・アスペクト形式をブラジル・ポルトガル語（以下、ポルトガル語とする）に訳すための翻訳規則の作成を試みたものである。日本語では、「ル」「テイル」「タ」「テイタ」という四種の形式でテンス・アスペクトを表すが、ポルトガル語では、テンス形式として「Presente Simples（現在形）」「Pretérito Perfeito（完成性過去形）」「Pretérito Imperfeito（継続性過去形）」「Pretérito Mais-que-Perfeito（大過去形）」「Futuro do presente（未来形）」「Futuro do Pretérito（過去未来形）」の 6 種を持つとされ、アスペクト形式も大きく「Imperfectivo（継続性）」「Perfectivo（完了性）」「Iterativo（反復性）」「Indeterminado（脱完成性・脱継続性）」の 4 種があり、さらに下位区分がなされて、都合 12 種類に分類される。

従来の日本語とポルトガル語の時に関わる対照研究は、こうした複雑さを十分に克服できておらず、このため日葡翻訳も適切な自動化が阻まれていた。本論文は、日本語の「トキ節」をモデルとして、日本語のテンス・アスペクト形式をポルトガル語に適切に翻訳する手順を組み立てることを企図したものである。

本論文は、「第１章序論」「第２章先行研究の概観と本研究の位置づけ」「第３章コーパスに見られる「トキ節」「Quando 節」におけるテンス・アスペクト形式の使用実態」「第４章既存の翻訳ツールによる「トキ節」のポルトガル語訳の正確さと問題点」「第５章「トキ節」のテンス・アスペクト形式に関する翻訳規則の一案」、「第６章「トキ節」と「Quando 節」の相関性と他の時間の複文節」、「第 7 章結論」の全 7 章からなる。

まず、第１章では、本論文の目的、日本語とポルトガル語の現象の観察と問題の所在の指摘、本研究の意義、本論文の構成と各章の概要が示される。続く第２章では、日本語とポルトガル語それぞれのテンス・アスペクト体系を比較する先行研究の検討が行われ、個別の形式の対照は行われるが体系的な分析は少ないこと、体系的に扱うものも主節述語の対照にとどまること、対訳コーパスを基にした研究も見られないとし、本論文では、対訳コーパスを基に翻訳規則を作成するアプローチを取ることが示される。

第３章から第６章では、実質的な調査・分析と翻訳規則の提案、その検証が行われる。

第 3 章では、日本語とポルトガル語の話し言葉コーパスを用いて、「トキ節」と「Quando 節」の共通点と相違点について検討が加えられる。両者とも主節規準現象が生じるが、量・質ともに差違が見られること、特に「テイル時」「テイタ時」の形式を翻訳する際にアスペクト解釈が問題となることが示される。

第 4 章では、Google 翻訳における「トキ節」の翻訳実態の分析が行われ、全体的な翻訳精度は 60%に満たないこと、誤訳のうちアスペクトに関わるものが 60%を占めること、アスペクトへの対処が日葡翻訳の課題であることが明らかにされる。特に「ルトキーテイタ」「タトキーテイタ」の組み合わせが最も翻訳精度が低く、ポルトガル語の完成性過去形で訳す誤訳パターンが見られること、主節述部が「テイタ」である場合が焦点となることが示される。

第 5 章では、これを受けて、著者が構築した日葡対訳データベースをもとに、「ル形ーテイタ」「タ形ーテイタ」の翻訳形式に関する分析と翻訳規則化が試みられ、最終的にフローチャートの形に組み上げられる。あわせて、その妥当性の検証が行われ、本論文が提案する翻訳手順が既存の機械翻訳よりも翻訳精度が高いこと、翻訳手順に残された不具合を修正した結果、ポルトガル語母語話者による 5 段階の容認度調査で 4.2 のスコアが得られたこと、これは、従来の規準で「十分な品質」と評価されることが示される。

第 6 章では、日葡対訳コーパスで「Quando 節」以外に「トキ節」の翻訳に用いられた「Ao + infinitivo」節と「Enquanto」節について取り上げ、「時間性」「条件性」「否定文との共起」の三点から検討を行い、これらはそのまま「トキ節」の翻訳形式とすることには問題があること、「トキ節」の翻訳形式としては「Quando 節」が最もふさわしいことが示される。

第 7 章では、各章のまとめが行われ、それぞれの成果とその意義とともに、残された課題が示される。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、言語学的な観点から日葡対訳について扱った、最初の研究と言ってよい。従来の日本語とブラジル・ポルトガル語のテンス・アスペクトの対照は、語学書の対照表を大きく出るものではなく、対訳データも少ないことから、実際の言語データを基にした言語学的な分析は、ほとんど行われていなかった。著者は、自身で日葡対訳コーパスを作成し、また機械翻訳を利用して誤訳のデータを集めるなど、基盤となる言語データを構築した上で分析を進め、規則化を試みた。今後の日葡翻訳に関する言語学研究は、すべからく本論文を踏まえることが求められる。本論文の価値として、まずはこの点を強調したい。

次に、本論文は、基盤となるデータの分析から翻訳規則を導き出し、それを組み立てて翻訳手順を構築することを繰り返す。そして、その翻訳手順は、別のデータにより検証し、その妥当性を評価する。こうした手法を徹底している点も評価される。こうした計算された手法は、随所に見られる。例えば、第 3 章から第 5 章までは、「トキ節」の翻訳に関わる問題がどこにあるのかを分析し、問題とすべき事象が何か、丁寧に絞っていく。問題に対する解決策もただ提案するだけでなく、すぐにその効果の検証が行われる。例外としてはじめから除外することも考えられる「Ao + infinitivo」節や「Enquanto」節についても、一章をさいて検討が行われ、それがどうして例外として処理できるのかを詳細に分析して示している。こうした誠実な態度が、本論文の信頼性を高めている。

さらに、本論文には、翻訳に関わる分析や提案だけでなく、言語学的な観点からも重要な指摘が各所に見られる。例えば、第 3 章において、「トキ節」と「Quando 節」の比較が行われるが、先行研究でも両者が主節時規準の解釈を受けることは指摘されていた。これは、両者とも相対テンスの可能性があることを示したにすぎず、その使用頻度に大きな差があることには十分な配慮がなされていない。著者は、まず、「トキ節」の約 40%が相対テンスであり、その全てが主節時規準であるのに対し、相対テンス解釈の「Quando

節」はわずか 2%にすぎず、主節時規準のものはさらにその半分にすぎないという量的差違があることを発見している。さらに、「トキ節」と「Quando 節」との質的差違について、①「トキ節」では、ル形で限界達成前の段階であること、タ形で限界達成後の段階であることを示す（すなわち、主節時規準が義務的である）が、「Quando 節」は随意的な主節時規準と義務的な主節時規準のものがあり、前者では現在形と過去形とを置き換えられるのに対し、後者では置き換えができないこと、②日本語では、主節のテンスは絶対テンスにしかなれないのに対し、ポルトガル語では主節がアスペクトを前面化させて、文全体のテンス解釈を従属節のテンス解釈に委ねる現象が見られること、③相対テンスを表す「トキ節」は文のアスペクチュアリティに制限がないのに対して、相対テンスを表す「Quando 節」は文のアスペクチュアリティに制限があり、ほぼ反復・一般化の用法が占めており、「Quando 節」における相対テンスは、一般的な「外的時間関係」を表すのではなく、「条件性」というムードを前面化したものと解釈する可能性があること、という 3 点を指摘している。これらは、「トキ節」と「Quando 節」の対照にとどまらず、相対テンスの研究に寄与するものと考えられる。

一方、著者自身が構築した日葡対訳コーパスは、個人的営為により作成されたものであり、規模が大きいとは言えない。本論文で焦点となる「ル形ーテイタ形」「タ形ーテイタ形」の「トキ節」は 70 例のヒットにすぎない。本論文と同様に翻訳手順のフローチャート化をもくろんだ先行研究では、分岐のそれぞれに該当するパーセンテージを示して、傾向性も示唆していたが、本論文ではフローチャートの末端では、該当する例がほんの数例しかなく、十分な傾向性を示すことができないものも見られる。今後、十分なデータを拡充することで、傾向性も示すことで、より実用性を高めることが期待される。なお、この点は、機械翻訳の結果や母語話者による評価など、他の方法で検証を試みているため、本論文の結論に大きく影響するものではないことを付け加えておく。

本論文は、本分野の嚆矢となる研究であり、分析や考察の質が極めて高い。翻訳分野のみならず、日本語とポルトガル語の対照研究やテンス・アスペクト研究などの分野にもインパクトを与えることが予想される好論文である。

2　最終試験

令和３年１月２１日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について筆者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、筆者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。